

文理連接研究会 2022 年度第 1 回 (2022/04/29)

「エコロジー」をどのように論じることができるのか (1)

・ エコモダニズムとラトゥールのエコロジー思想

荒金直人 arakane@keio.jp

【1】リュック・フェリー『七つのエコロジー』/ Luc Ferry, *Les sept écologies*, 2021.

1. 崩壊主義 (破局は迫っており、不可避である)
2. 警鐘主義・改革派 (持続的発展)
3. 警鐘主義・革命派 (全方位的衰退)
4. エコフェミニズム
5. 反植民地主義
6. ヴィーガン
7. エコモダニズムと循環経済 (無限の成長、環境汚染ゼロ)

※ リュック・フェリーは後ろ向きで懲罰的なエコロジー思想に反対し、技術革新と政治力による前向きな解決を目指すべきだと考える。

【2】「エコモダニスト宣言」(2015 年) / An Ecomodernist Manifesto.

- ・ 知識と技術によって「良き人新世」を構築する必要がある。
- ・ 人類は自然を守るために環境への影響を縮小しなければならないが、それは自然と調和しなければならないということではない。人間の活動を集約して環境への介入を少なくすることで、経済発展と環境保護を両立することができる。人類の繁栄は自然を犠牲にして獲得されるのではなく、両者を「分離 decoupling」して両立させなければならない。
- ・ 経済成長に対する自然破壊の割合が小さくなることを「相対的な」分離、経済成長にも拘わらず自然破壊が減少することを「絶対的な」分離と見做すことができる。
- ・ 人間と自然の分離の程度は、技術と人口の変化に依存する。世界人口は今世紀中にピークに達し、それ以後は減少する可能性が高い。(あとは技術に懸かっている。)
- ・ 地球の表面の 1~3%の土地に 40 億人の人間を住まわしている「都市」の形成は、人間と自然の分離の象徴である。
- ・ 都市化、農業の集約、原子力、水産養殖、海水淡水化などによって、自然環境に対する人間の依存度を減らし、人間以外の種により多くの場所を残すことが可能になる。
- ・ 温暖化は根本的には技術によって解決されるべき問題である。たとえ世界全体で一人当たりのエネルギー消費量を厳しく抑えたとしても、温暖化対策としては不十分である。経済活動のための十分なエネルギー供給を確保しつつ、脱炭素化することが必要である。環境への影響を最小限にするために、長期的には、高効率の太陽電池、先進的な核分裂技術、そして核融合技術などが必要である。
- ・ 人間と自然の分離は、人間の自然への物質的な依存が過度に破壊的にならないための手段に過ぎない。しかし、もし我々が自然への愛着を感じているのであれば、より積極的に分離を進めるべきである。ただし我々が自然と呼ぶものは既に何千年にもわたって人間によって改変されてきたものである。環境は多様な地域的・歴史的・文化的選択によって形成される。その選択は様々であり、唯一の正答というものはない。

・ 人類の繁栄と自然環境とを分離するためには、技術を進歩させるための確固たる意志のみならず、それに歩調を合わせる形で、社会・経済・政治を継続的に進化させなければならない。人類が繁栄し、同時に生態系が繁栄する地球、それは実現可能であるだけでなく、両者は不可分である。

※ 私は以上のようなエコモダニズム思想の方向性に概ね賛成できる。特に、①環境問題に対して政治と技術による前向きな解決を目指している点、②愛着と保護の対象である「自然環境」について、それが本質的に純粋なものではないということを引き受けている点、この二点は共感できる。ラトゥールの思想と比較してみたい。

【3】ブリュノ・ラトゥール & ニコライ・シュルツ『新エコロジー階級についてのメモ』／Bruno Latour et Nikolaj Schultz, *Mémo sur la nouvelle classe écologique*, 2022.

- ・ 副題は「如何にして自覚的で自尊心のあるエコロジー階級を出現させるのか」。
- ・ 自然について論じるということは、平和条約を結ぶことではなく、日常的な存在におけるあらゆる可能な主題に関して、あらゆる次元で、全ての大陸において、多くの衝突が存在することを認めることである。自然は、統合するどころか、分裂させる。(p.11)
- ・ 今日、破局の確信はむしろ行動を麻痺させているように思われる。少なくとも、世界についての表象と、始動させるべき活力と、守るべき価値との間に、直観的な連携は存在しない。逆に、あらゆる直観は、生産に対する古くからの理解をそのまま「反復」する方向へ向かっている。このような麻痺状態の原因について診断を下し、不安と集団行動と理想と歴史の方向性との間に新たな連携を探し求めることが、新たなエコロジー階級の責務である。(p.27)
- ・ 生命の条件の維持のために必要な産出(engendrement)を促進することが重要である。生産〔ないし製造〕すること(produire)それは寄せ集めて組み立てることであり、産出〔ないし生成〕すること(engendrer)つまり世界の居住可能性の拠り所となる諸存在に気を配ってそれらの間に連続性を生じさせることは、別のことである。(p.30)
- ・ 「衰退させること」〔経済成長を逆行させること〕が重要なのではなく、ようやく〔本当の意味で〕繁栄させることが重要なのである。(p.30)
- ・ エコロジー階級は少なくとも二つの前線で戦わなければならない。見せかけだけのグローバル化に対して、そして国境の内側への回帰に対して。なぜなら、どちらの運動も居住可能性の問いから切り離されているのだ。(p.37)
- ・ 地球システムに関する論争的な主題は全て「自然」科学を経由する。なぜならエコロジー階級の意識自体の起源に、その大部分において、自然科学があるのだ。科学がなければ世界の喪失に関して何か確実なことを知りえただろうか。とは言え科学は、自由主義や社会主義の時代に演じることができたような、制御と保証の役割を占有していない。かつて科学は、「何をすべきか分かっている」という口実の下、政治なしで済ますことを可能にしていた。生物によって形成された大地についての新たな科学は、この惑星の振る舞いの状況、絶えず論争的になる驚異的なこの状況の探究に、むしろ付き従うのである。(pp.68-69)
- ・ 欧州連合はエコロジー階級にとって実際の規模での実験の例なのであり、そこでは諸国家の内部と外部の再分配が、他の諸階級を先導することのできる未来の機軸階級としてのエコロジー階級の役割を準

備している。(p.83)

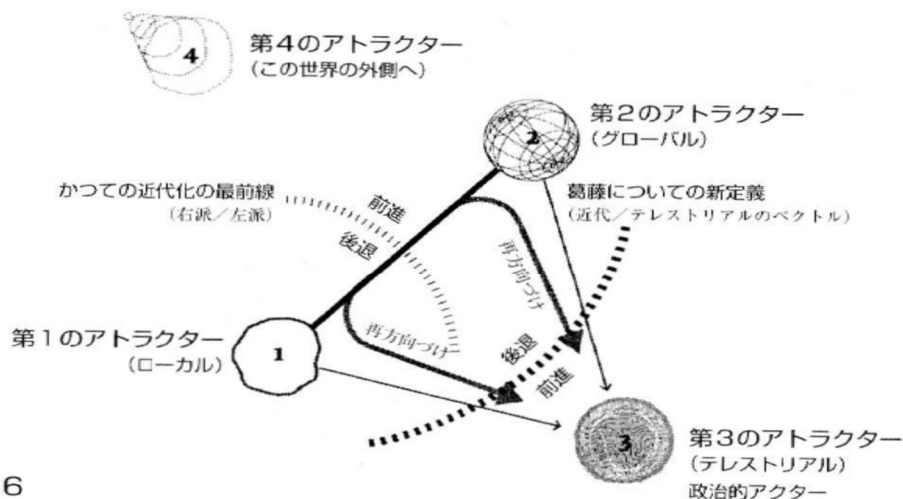
【4】ブリュノ・ラトゥール『地球に降り立つ——新気候体制を生き抜くための政治』（邦訳 2019 年）／ Bruno Latour, *Où atterrir ? Comment s'orienter en politique*, 2017 [どこに着地すべきか？政治において如何にして自らを方向付けるのか]。

・ 気候問題とその否認に注目しなければ過去五十年間の様々な政治的立場について何も理解することができないというのが、我々の仮説である。我々は(新気候体制)に突入した。そう考えるのであれば、格差の爆発的増加も、規制緩和の拡大も、グローバル化に対する批判も、そして特に国民国家による古くからの保護に回帰したいという激しい欲求——それは誤って「ポピュリズムの台頭」と呼ばれている——も、理解することができない。(p.10)

・ 「土地」という概念自体が性質を変えつつあるのである。(p.13)

・ グローバル化がこのまま進んで行くな、その発展の希望と両立するような惑星は存在しない。(p.14)

・ 図 (邦訳 p.82)



▲ 図6
新たな同盟者グループ

・ 自然を守るように言われたときと、領土を守るように言われたときでは、駆り立てられる感情が同じではない。前者の場合あなたは退屈であくびをし、後者の場合あなたはすぐに動員される。もし自然が領土になったなら、「生態学的危機」や、「環境問題」や、「生物圏」を取り戻したり、傷つけないようにしたり、保護したりするという問題について論じることは、もはやほとんど意味がない。それより遥かに死活に関わる問題であり、実存に関わる問題なのだ。(p.18)

・ 如何なる確かな知識も、独力では成立しない。諸事実が確固たるものであり続けるのは、それらを支えるための共通の文化、信用することのできる諸制度、それなりにまともな公共生活、多少とも信頼できるマスメディアなどが存在する場合に限られる。(p.35)

・ 完新世[一万年前から現代まで]は「枠」としてのあらゆる性質を備えており、その内部であまり苦勞することなく人類の行為を区別することができた。演劇において建物や舞台裏のことを忘れて筋立てに集中できるのと同様である。人新世においてはもはやそうではない。そこではもはや気候の小さな変化ではなく、地球というシステムそれ自体を巻き込む変動が問題になっている。(p.59)

・ 慣例的な認識論を鵜呑みにするなら、政治化することのできない「自然」という観念に閉じ込められる

ことになる。なぜならこの観念は、議論の余地のない客観的自然の法則に訴えることで、まさに人間の行為を制限するために生み出されたのだから。(p.85) 我々が為すべきことは、科学の力量全体を当てにすること、ただしその力量に結び付けられた「自然」のイデオロギーなしでそうすること、である。(p.86)

・「自然」から(地球的なもの)に注意を向け直すことで、気候に関する脅威の出現以来いくつかの政治的立場を固定し、いわゆる社会的な闘争といわゆるエコロジ的な闘争の連結を危ういものにしてきた分離状態に、終止符を打つことができるかもしれない。新たな連結が意味するのは、生産 (production) システムの観点での分析から、産出 (engendrement) システムの観点での分析への移行である。二つの分析はまず各々の原理において異なる(一方が自由、他方が依存)。次にそれらは人間に与える役割が異なる(一方では中心的、他方では分配された役割)。最後にそれらは引き受ける運動の類型が異なる(一方はメカニズム、他方は生成)。(pp.105-106)

・唯物論者になるということは、もはや必ずしも世界を諸対象に還元するということではなく、考慮に入れるべき運動の一覧表を拡張するということ、つまりシリウスからの視点(遠方からの客観的視点)では詳しく追跡することのできない生成の運動を考慮に入れるということである。地球人は、存続するためにどれだけの数の他の存在を必要としているのかを見出すという、非常に繊細な問題を抱えている。(p.111)

ラトゥールの論点

- ・地球システムは人間の行為の枠組みではなく、それ自体が行為者である。
- ・環境問題に対応できる政治的な力を形成する必要がある。
- ・工業生産の論理ではなく生命産出の論理で考察することが重要である。
- ・地球規模での居住可能性が問題なのであり、グローバルかローカルかという問題ではない。
- ・科学の知見は極めて重要であるが、客観的自然の名の下で政治的な議論を封じるべきではない。

今日の結論

・エコモダニズム宣言とラトゥールのエコロジ思想との間に矛盾はないように思われた。ただし、前者が表明するある意味で現状追認的な楽観主義と、後者が描写する世界観の大転換の間には、やはり違いがあると感じる。

今後の考察の方向性

- ・エコモダニズムとの距離を測りつつ、ラトゥールのエコロジ思想を、政治と科学についての考察を中心に整理したい。

困みに今読み途中の本

- ・ Bruno Latour, *Face à Gaïa, Huit conférences sur le Nouveau Régime Climatique*, 2015. 〈新気候体制〉についての分厚い本。
- ・ オズワルド・シュッツ著、『人新世の科学——ニューエコロジがひらく地平』、岩波書店、2022年。「生態系横断的な栄養塩の流れの発見は、生態系を自立した存在として考えることがもはや不可能であることを示している。固有の安定した内部バランスというものは事実上存在しない。その代わりに、自然は收拾がつかないほど動的だとも言える。栄養素は絶えず再分配され、生物は時間と空間の中での栄養素の供給に応じて、その行動、生理学、生活環に必要な再調整を行うのである。」p.92

(以上)